

プロジェクト名：館・河川・交通路・町場からみる中世在地領主の一族・被官関係の復元的研究

プロジェクト代表者：清水 亮（教育学部・准教授）

1. 問題の所在

従来、在地領主という存在は、武士（武士団）とアприオリに同義の存在とされ、現地を支配する領主権力としての経済的側面を「在地領主」、戦闘組織としての側面を「武士団」と表現してきた。しかし、「武士」の本質が、武芸・戦闘を家業とすることを国家・社会から認証された職能人であることが明らかにされ（高橋昌明1999）、殺人を生業とする武士がどのようにして在地領主として地域社会に存立し得たのか、という問題が浮上するに至った。この問題に迫ったのが紀伊国湯浅党を素材として武士団の地域における存在形態を追究した高橋修氏の研究である（高橋修2000）。このような研究動向を踏まえて、私は、武士団≡在地領主を村落を支配する権力体としてのみ見るのではなく、経営体（企業的存在）として捉え直し、常陸平氏真壁長岡氏が、加波山麓の真壁郡長岡郷の領主であると同時に、一族を鹿島社神宮寺の僧侶として送り込み、地方都市鹿島での経済活動を担当させていたという一族間の分業関係を明らかにした（清水2005）。このような在地領主一族間の分業関係や力関係、在地領主当主と被官（従者）の分業関係の様相を、現地調査や近世・近代史料を駆使することによって浮き彫りにすることが本研究の目的である。

惣領・一族・被官相互の力関係を規定するのは、彼らが持つ政治的ネットワークと、彼らが立脚する拠点（館）の立地であると予想される。そこで、在地領主組織の構成員個々が持つ政治的ネットワークと現地での社会的機能を、館の立地形態から明らかにする。その際、人的・物的ネットワークを担保する道・河川・町場と館の関係を聞き取り調査、古絵図、近世・近代史料など多様な史料を駆使することで具体的に跡づけたい。研究の素材としては、一族・被官の構成が明確に判明し、彼らの館跡が多く残っている越後國小泉莊加納方（現村上市）の地頭色部氏、武士団としての研究は多く蓄積されているが、その在地領主としての側面は検討されてこなかった武蔵国秩父一門の嫡流畠山氏を取り上げた。

2. 研究の方法と成果

中世文書の分析に加えて聞き取り・現地踏査による調査、近世・近代の文書・絵図、中世の金石文などの地名表記を駆使することによって、空間から在地領主の一族間の関係、あるいは当主・被官の関係を明らかにすることを目指し、下記の成果を上げた。

A. 小泉莊加納方地頭色部一族の事例

以前、私は、鎌倉末期の色部一族（小泉莊加納方地頭・秩父一族）の内部では、惣領に対抗的な二つの庶子家と、惣領との度重なる婚姻関係によって存立を図る庶子家がいたこと、「色部条惣領職」を標榜する惣領家のもとに庶子家が結集し、その後、被官と一族の支持によって惣領の権力が拡大されつつ、一族と被官の連合体に惣領の行動が規制される具体相を明らかにした（清水 2008）。この成果を踏まえ、鎌倉末期における色部一族の複

雑な関係が生じた要因を荘園現地の状況から追究することを目指した。その結果、惣領家との関係が深い宿田家の領地は、日本海交通に直接アクセスする拠点を持ち得る条件を持たなかったこと、惣領家に反抗的な二つの庶子家は、日本海に抜ける内水面通路を掌握した惣領家の館を経由せずとも日本海交通にアクセスする条件を備えていたことが明らかになった。そして、南北朝期の色部惣領が、各庶子家を従属させ得た背景には、惣領家の政治的優位という条件に加え、戦乱時に惣領家が岩船宿の保全に努めた結果、当時の小泉荘加納方で最も重要な交通・流通の拠点である「岩船」の住民から領主としての認知を受け、小泉荘加納方において名実ともに流通・交通の最大の支配者となったという事情があったことを明らかにした。これらの作業によって、武士団内部の政治史を解く上で、一族個々の館や近接する町場、水陸交通路の復元的研究が有効であることを示した。

B. 畠山重忠の事例

畠山重忠は、熊谷直実とならんで、埼玉県域で活動したもっとも著名な武士である。この畠山氏の領主としての実像を明らかにすることで、東国の「豪族的武士団」と呼ばれる有力武士団が在地領主としてはどのような存在であったか、という問題に迫った。

まず、系図の検討によって、畠山氏が、同じ秩父一族の平児玉氏・江戸氏と姻戚関係を結んで畠山・平児玉・江戸の連合による荒川水運掌握を企図し、秩父一族の家督河越氏を排除した物流支配を志向していたことを明らかにした。また、畠山氏の本領地「畠山」が「畠山庄」という荘園ではなく、男衾郡に属する国衙領の郷であり、彼が従者としていた武蔵北西部一帯の郷レベルの領主と所領の大きさはほぼ同じであることを明らかにした。次に、郷レベルの領主である畠山氏が、なぜ郡・郷の範囲を越えた軍事動員をなしえたのか、という問題に対して、①畠山氏が「庄司」という有力国衙在庁であり、かつ京都の貴族社会とも深い交流を持つ政治的・文化的な優位によって郷レベルの在地領主を自己の武士団に編入し、地域社会に参入し得た、②郷レベルの領主である従者たちからみると、彼らは畠山氏の持つ京都の文化・技術や国衙在庁の政治的能力を地域社会に誘致したと捉えうる、という新知見を提示した。すなわち、「豪族的武士団」とは、所領の大きさに関係なく、政治的・文化的優位に基づき、郡・郷を越えた主従関係を設定しえる武士団である、と再定義できる。

以上のような、畠山氏の存在形態・従者獲得のあり方は常陸平氏嫡流多気氏（高橋修 2007）、越後城氏（高橋一樹 2010）と共通するものであり、12世紀の「豪族的武士団」に一般化し得るといえよう。

【引用文献】

高橋 昌明『武士の成立 武士像の創出』（東京大学出版会、1999）

高橋 修『中世武士団と地域社会』（清文堂、2000）

高橋 修「常陸平氏再考」（茨城大学人文学部主催シンポジウム「北関東の武士たち」報告レジュメ、於茨城大学、2007・12・6。2010 発表予定）

高橋 一樹「『御館』城氏の軍団編成」（入間田宣夫編『兵たちの時代Ⅰ 兵たちの登場』高志書院、2010）

清水 亮「了珍房妙幹と鎌倉末・南北朝期の常陸国長岡氏」（『茨城県史研究』89、2005）

清水 亮「南北朝期における在地領主の結合形態—越後國小泉荘加納方色部一族—」（『埼玉大学紀要 教育学部』57-1、2008）